

# 十人十色 適材適所 性別不問

【連載エッセイ】

— 第3回 —

## セカンドチャンス社会へ 女性の再就職を考える

大沢 真知子 ● おおさわ まちこ

日本女子大学現代女性キャリア研究所所長。同大学人間社会学部教授。南イリノイ大学経済学部博士課程修了 (Ph.D (経済学))。シカゴ大学ヒューレット・フェロー、ミシガン大学助教授、亜細亜大学助教授を経て、現職。著書に「女性はなぜ活躍できないのか」(東洋経済新報社)、「妻が再就職するとき」(NTT出版)、「日本型ワーキングプアの本質」、「ワークライフシナジー」、「ワークライフバランス社会へ」(以上岩波書店)、「21世紀の女性と仕事」(放送大学教育振興会) など多数。

**結** 婚や出産を機に、仕事を辞める女性が多い日本。そして、いざ再就職をしようとしても、離職期間が

長いほど難しくなる現状があります。第3回は、こうした女性たちが再就職

を果たすためにどんな政策が必要なのかを、アメリカの事例を紹介しながら考えます。

今年の夏は、仕事の方はいっこうに進まなかったのだが、料理の腕だけは上がった。原稿のアイデアは浮かばないのに、毎朝冷蔵庫をのぞいて、そこにある野菜や昨夜の残り物などを見ると、おもしろいようにインスピレーションがわき、さまざまな調理の可能性が頭に浮かんだ。こんなことは今までになかった。

これまで、仕事帰りとなると、あり合わせのもので済ませてしまうことが多かった。また、夫が料理好きということもあり、やっってもらうことも多い。なので、ことさら料理が好きというわけでもない。そんな私が、今年の夏は、料理を作り続けたのは、ネットでのレシピ検索をもとに、そこに私なりの工夫をすること、オリジナリティを加えられるようになったからだと思う。

例えば、水茄子のつけもの。市販されているものは量が多く、夫婦ふたりで毎日食べると飽きる。しかし、残してはもったいない。そこで、洋風の味付けにして、オリブオイルをかけてみるとこれがいける。油揚げが残っているので、オーブントースターでカリカリに

焼いてサラダに入れてみるとまた違った味わいになった。キャベツの残り物に軽く塩をふつておき、翌日ヨーグルトであえるとちよっと変わった一品に。さらには、残り物の野菜でマリネを作っておき、これまた残り物の豆腐の上のにせてみたら、これもいける。

レシピを検索してもわが家にはない材料も多い。そんなときに代用できるものを探すのも楽しい。どれも思いがけないおかずに変化をつけて、新しい発見につながる。



## Think outside the Box

デフレ時代には、新しいものを買うのではなく、今あるものを大切にすることで創意工夫を加えることで付加価値を付けていく、あるいは変化をつけていく。そんな楽しい節約生活が求められている。こうした時代にお薦めなのが、固定観念にしばられず、型にはまった考えから少しだけ自分を解放してみることである。英語では、これをThink outside the Boxといい、行き詰ったときの考え方として、薦められることが多い。人生の選択においても、重要な考え方であると思う。この少しずつの工夫がオリジナリティやイノベーションにつながる。

さまざまな可能性や選択肢を考えるときに、思い切って自分がこだわっていることを外から見してみる。本当にそれにこだわる方がいいのか。自分に向いているものは他にあるのではないか。自分が本当にやっていて楽しいと思うときはどんなときなのだろうか。

このような考え方がより大事になるのは、初職の選択よりも再就職時においてである。というのも再就職には専門性が問われるからだ。

## 再就職はセカンドチャンスを得ること

2008年3月にアメリカ大使館と勤務校（日本女子大学）との共催で国際シンポジウムを行った。リーマンショック前後の景気後退期で、その年の初めには、派遣村が日比谷公園に設営され、暗いムードが漂っていた。そんな中で、大使館の方とお話していたのだが、アメリカ社会の良いところは、いつでもやり直しができるところではないかということになった。とくに、結婚や出産を機に仕事を辞めた女性の再就職は、終身雇用制度が揺らぐ中で、非常に重要な政策になっていくのではないかという結論になった。それでは、それをテーマにした国際シンポジウムをやるということの話がまとまったのである。そのときのアメリカ側から提案されたシンポジウムのタイトルがCreating Second Chance for Womenということに落ち着き、駐日韓国大使館も後援してくださった。

再就職をセカンドチャンスと考える見方は、そのときに初めて知った。また、基調講演をしてくださった、キャロル・フィッシュマン・コーエンさんのお話をうかがって、目からうろこが落ちた。

キャロルさんはハーバード大学の経営大学院を出た才媛である。投資会社に勤め、活躍をしていた。結婚して出産し、育児中に勤めている会社が倒産し、行き場を失った。そうこうしているう

ちにさらに3人の子どもを出産、10年以上主婦として子育てに専念していた。再就職をしたのは42歳のときである。

子育てに追われるうちに、新聞を読んだりする習慣もなくなり、経済の状況にも疎くなった。子どもたちの世話に追われているうちに、外見にも気を使わなくなり、流行からも取り残されていったのだそう。

そんなある日、出身校が同窓会を開催し、そこで自分と同じように、再就職をしたかと思いつきながら、果たせない女性たちに出会うことになる。独身時代は、投資銀行の管理職であったり、マーケティングのディレクターをしていたりした女性たちが、長い就業中断期間を経て、再度働くというときになると、みな一様に大きな不安に襲われるという。その不安を共有できたことが、キャロルさんにとって何ものにも代えがたい収穫だったという。

私の勤める大学でも再就職をめざす女性たちのためのリカレント教育課程があるのだが、そこでも同様の声を聞く。同じような境遇の人と出会い、自分の持っている悩みや不安を話すことで、先を見ることができるようになるのだそうである。

Think  
outside  
the  
Box

キャリアルさんはその後、昔のネットワークを通じて再就職をする。昔の部下のもとで働くことになった。再就職には昔の職場で培ったネットワークが使える。昔の同僚や上司に会ってみるのもいいかもしれない。今は、いったん退職した従業員を再雇用する制度を持つている企業も増えている。

### 人生のリセットボタンを 押して再出発する

キャリアルさんは仕事をしているうちに、自分にはその仕事はそれほど向いていないのかもしれないと思うようになった。そして、一年で辞めてしまったのだ。そして、友人と再就職支援の会社を作る。その会社の名前は、iRelaunch社。Relaunchをカタカナにするとりローンチとなる。聞き慣れない言葉だと思いが、再出発をするという意味である。

少し前の新聞記事になるが、「人生のリセットボタンを押したいか」という質問に46%が「はい」と答えていた。りローンチというのは、ここでいうリセットボタンを押しして新しい人生を歩み始めるといったような意味で使われる。

やる気があればやり直しができる社会としてのアメリカ。それがセカンドチャンス社会。先の国際シンポジウムでも、メインテーマとして熱い議論が展開された。

今はグローバル化とともに、多くの国で格差の拡大が起きており、アメリカでも昔ほど機会が誰にでも開かれているわけではない。しかし、そのスピリットは今でも生きている。アメリカでは高等教育機関が大きな役割を果たしているのだ。学び直しを通じて、現在働いている職場で昇進する場合でも、あるいは、再就職をする場合にも、近くのコミュニティカレッジ（2年制の公立短期大学のこと、授業料が安く地域の住民なら誰でも入れる職業訓練的な技術専門教育機関）で必要なスキルを身につけることができる。また、もう少し高度に専門的なスキルを身につけたいという場合には、専門職大学院がある。

### 少ない日本の社会人入学者

アメリカでは、このように社会人教育によって、学び直しながら仕事をしている人は少なくない。例えば、大学の入学者の中に占める25歳以上の割合は20・9%であるのに対して、日本では1・7%と非常に低くなっている（OECD 2008年のデータ）。

先日、今後の日本の生涯学習社会を展望するフォーラムが都内で開かれた。私も女性の再就職について話をさせていただいたのだが、日本で生涯学習と

いうと教養を身につけるための授業が多く、職業スキルを身につけるための学び直しはあまりない。それが日本と欧米諸国との大きな違いになっている。その理由を簡単に言ってしまうえば、日本は、セカンドチャンスを得るのが難しい国だからである。

日本は、企業による人材育成のプログラムが非常に発達しており、職業訓練も主に企業側が実施している。他方、自ら企業を移りながらキャリアを築いていく社会にはなっていない。経済学では後者を外部労働市場というのだが、この労働市場が未発達なので、いったん企業を退職すると、離職期間が長くなるほど再就職が難しくなる。

また、非正規労働者は、最初から企業の訓練の枠組みから除外されている。多くは若者であるが、中高年にも多い。今求められているのは、この外部労働市場を整備して、外部労働市場と内部労働市場をつなぐこと。

日本には働きたいのに実際には働いていない女性が少なくとも300万人はいると見込まれている。その多くは子育てを終えた（あるいは子育て中の）女性たちである。この女性たちが働くことでGDPが約15%増えると予想されている。

新しい生涯学習社会を作ることは、経済の活性化にもつながるのである。

[連載エッセイ] 第3回

色所問  
十適不  
人材別  
十適性

